

第12回「私たちと北方領土」作文コンクール

入 賞 作 品

北方領土問題対策協会理事長賞

日本とロシアと北方領土

黒部市立高志野中学校 三年 山崎 恵澄

北方領土とは、歯舞群島、色丹島、国後島、択捉島の四島からなり、いまだかつて一度も外国の領土となったことがない、我が国固有の領土である。しかし、終戦直後にソ連軍により北方領土は不法占拠され、ソ連が崩壊しロシアとなった現在も続いている。戦後、日本は一貫して、北方領土の返還をロシアに対して要求しているが返還の見通しは立っておらず、北方領土問題は解決していない。

今年、僕は北方四島交流事業に参加した。この事業は、「北方領土問題解決までの間、相互理解の増進を図り、領土問題の解決に寄与すること」を目的とするびざなし交流だ。

択捉島へ上陸したとき、まるでそこは「外国」であり、景色が日本とはまったく違った。上陸後、島内視察やホームビジット、日本人墓地の墓参など、たくさんの体験ができた。特に日本人墓地の墓参が印象に残った。墓石には、

漢字が彫ってあり、かつて北方領土には日本人が住んでいたことを確認することができた。

現在の択捉島では、多くのロシア人が普通に生活を送っていた。また、ロシア人との様々な交流行事を通じて、日本の生活や文化などを伝え、四島在住ロシア人に日本の存在を意識させることができたと思う。このことから、北方領土問題に関する日本の立場を四島在住ロシア人に理解してもらうことは大切であると改めて感じた。同時に、領土問題に関する日本の立場を主張するあまり、領土交渉の場とならないよう注意が必要だと思った。

僕は、島へ訪問するまでは、「北方領土」という言葉は、テレビや教科書などでしか聞いたことがなく、あまり関心がなかった。しかし、今年北方四島交流事業に参加したことで、北方領土問題をいち早く解決することが大切だと気が付いた。なぜなら、日ソ共同宣言によって両国間の国交が回復されてから既に六十年以上が経過しているのにもかかわらず、いまだ問題が解決されていないからである。時間がたつにつれて、領土問題の解決は困難になると思い、自分に何か出来ることはないか考えた。本や資料などで調べてみると、返還要求運動という活動があった。かつては、根室市、北海道、返還運動団体を中心となって運動が

進められており、現在は全国に運動の輪が広がっているそう。しかし、返還要求運動を担ってきた元島民の高齢化が問題となっている。だから、今こそ若い世代がこの運動に参加すべきである。返還要求運動を粘り強く続けることが、領土問題の解決につながっていくだろう。

北方領土に実際に訪問し、領土問題について調べていくうちに、自分が思っているよりも、北方領土は身近な存在であることに気付いた。また、日口間の真の関係改善のためには、領土問題を早期に解決することだけでなく、平和条約を締結する必要がある。そのためには、国民一人ひとりがこの問題について正しく理解し、政府の外交交渉を支援することが重要になってくる。

日本は、北方領土問題が解決するまで、この問題と向かい合っていかなければならない。領土問題を解決することは簡単ではないが、まずは、北方領土問題について広く周知・啓発する活動を、今後継続して行っていきたいと思う。

届かない声

黒部市立高志野中学校 三年 川端 万葉

私は今年、北方領土問題についての「声」をたくさん見聞きしました。

一つは、「北海道派遣団」に参加したときです。結団式の日に初めて元島民の方の話を聞きました。元島民の方は、北方領土での思い出を語り、最後に「故郷の土が踏みたい。」と涙ながらに言いました。その声や言葉が印象的で忘れられません。また、北海道根室市で行われた「北方領土返還要求根室市民大会」に参加したとき、大会の最後に、参加者全員で「北方領土を返せ。」「北方領土は日本固有の領土だ。」と訴えました。力強い声に圧倒されました。

二つ目は、総合的な学習のときです。総合のときには、必ず一枚の新聞記事が配られます。記事には、興味深いものがたくさんありました。中でも衝撃的だったのは、現在北方領土に住んでいるロシア人の声です。「島は忘れては

しい。」「平和条約はあってもいいが、領土は渡さない。」「島はロシアのもの。」という声です。私は驚きのあまり、言葉もありませんでした。

このような多くの声を見聞きし、考えたことがありません。それは、北方領土問題は国際的な交渉以前の問題だということ、日本全体の問題だということです。

もし、北方領土が日本に返還されたとしたら、豊かな水産資源や地下資源を使った産業がさらに活発になると思います。また、北の大地に残る豊かな自然を利用した観光開発もさかんに行われるかもしれません。そして、何よりも元島民の方々にとっての「ふるさと」が返ってくるようになります。

しかし、領土が返ってくるとなると、現在北方領土で生活をしている一万六千人を超えるロシアの人々は、七十三年前の元島民の方々のように、ふるさとを追われなければなりません。また新たな悲しみの歴史が繰り返されることになります。だから、国際的な交渉の前に、元島民の方々と現島民の方々の意見や思いを伝え合うことが重要だと思います。

もう一つの日本全体の問題ということについては、北方領土問題に関心をもっている人がとても少ないことです。

根室市と姉妹都市である黒部市でも北方領土に関する訴えや広報を目にすることはときどきありますが、北海道、特に根室市に比べたらその温度差は歴然としています。黒部市でもそうなのだから、他の県や市町村では関心のない人も多くいるに違いありません。また、派遣団として北海道に行った際に、私は「日本人の七割は北方領土問題についての関心がない。」ということを知りました。これを聞き、北方領土問題を日本全体の問題として捉え、日本人全員が関心をもって考え、行動していくことが大切だと思いました。

戦後七十年以上たった今、元島民の方々の高齢化が進む一方で、残念ながら北方領土が日本に返還される様子は見られません。しかし、人々の意識が変わり、さまざまな声に耳をかたむけることで、関心をもつ人が増えることで、そして、未来を想像することで、北方領土問題が解決へと近づくのではないかと思います。そのためにも、私は、まず身近な人から自分の体験や見聞を伝え、たくさんの人に関心をもってもらえるように努力したいと思います。

そして、いつの日か元島民の方々をはじめ私たち日本人が制限なしで自由に北方領土への行き来ができることを強く望みます。

富山県教育委員会教育長賞

僕たちと北方領土

氷見市立北部中学校 三年 澤森 理成

北方領土問題の解決の糸口は、僕たちの意識にある。これが、僕がたどり着いた答えだ。

僕は、八月十九日から二十二日までの四日間、北方領土返還要求運動富山県民会議主催の北方領土青少年等現地視察事業に参加した。

一日目は、根室市歴史と自然の資料館に行き、北海道と北方領土の歴史や自然について学んだ。たくさん人の剥製から自然の豊かさを感じ、樺太の国境標石からは、北海道のまだ先に日本の領土があったという事実改めて気付かされた。

二日目はまず根室市役所を訪問した。長谷川市長のお話をお聞きしながら、北方領土問題の深刻さを実感した。その中で最も印象に残ったのは、「これからの二、三年が大切」という言葉だ。「これからの二、三年が北方領土問題

にとつて、とても大切な時期で、この間に解決できなければ、五十年後や百年後に先延ばしにされかねない。それほど領土問題は、時間がかかる難しい問題」なのだそう。解決させたいという強い思いを受け止めつつ、そんな大きく難しい問題に対し、今、僕たちがやるべきことは何なのかと思つた。

次に納沙布岬に行つた。見えたのは岬の先の美しい島々だ。何の違和感もなく、船で行き来できそうな島だつた。それが歯舞群島の貝殻島と水晶島だと知り、展望室に上つてテレビ望遠鏡で見ると、礼拝堂が見えた。人々の暮らしがそこにあつたことがよくわかつた。

その後、北方四島交流センター(ニ・ホ・ロ)を訪問した。ニ・ホ・ロとは、日本とロシアをつなぐ北海道という意味があるそう。ここは、日本人とロシア人が互いに文化交流できる施設で、日本とロシアのそれぞれの国の特徴を表した文化ルームがあつた。

施設を見学し終えた後、元島民の鈴木咲子さんからお話をお聞きした。

鈴木さんは、択捉島に十歳まで住んでいたが、ロシア人に追い出されてサハリンに連れて行かれ、帰国後も惨めに暮らしたそう。自分の故郷を奪われたというつらさは

きつと計り知れないものだつたらうと思つた。当時、ロシア人をとて憎んでいたと言われたとき、僕も許せない思ひになつた。

しかし今、鈴木さんには当時のような憎しみはない。そのきつかけになつたのが、択捉島に墓参りに行つたとき出会つたロシア人の少年の「こんにちは」という言葉だ。言われたとき、感動して気持ちになつたように感じたそう。その二年後、ロシア人の青年に「ロシア人のことを憎んでいますか？」と聞かれ、とても驚いたが、今まで心にかけていたことを全て話すと、青年とその母親は自分の国を恥じてくれたそうで、そのことで気持ちが大きく変化したと言われた。今では、北方領土でロシア人と共に暮らすことを考えるようになったと話してくださつた。

最後に鈴木さんが「今は時間をかけてでも丁寧に交渉することが大切なので、私は残りの人生を返還運動にかけよう。あなたたちには、このことに関心を持ち、忘れないように大人になつて、活動を続けて欲しい。」と言われた。僕は、人々の思いが領土という大きな問題を少しずつ前に進めているのだと知つた。

氷見市に住んでいる僕は、北方領土問題は遠いところの問題、政府が考えることで僕たちでは解決できるはずのな

い問題のように感じていた。しかし今回の活動を通して、この問題の解決を心の底から願っている人が何人もいることがよくわかった。だが、北方領土問題は、元島民やそれに直接関わる人だけのものではない。誰かを犠牲にして問題は解決しない。だから僕たちも、事実をしっかりと知り、情報を発信していかなければならない。何かを発信しない限り前進はしないのだ。

今回の活動で、僕はかけがえない経験をした。この活動を通して自分が得たことを、これからにつなげていきたいと思う。

富山県市長会会長賞

日露共存の道へ

射水市立小杉南中学校 三年 島田 寧桜

「私は、一度故郷の地を踏んで、涙を流しました。」

八月三日から六日に行われた第四十九回富山県北方領土復帰促進少年少女北海道派遣団研修旅行の結団式で、元島民の方から聞いた話の中で、最も心に残っている言葉。自

分の故郷に帰るのは自由であるはずなのに、ロシアに不法に占拠されたことよって、それが叶わなくなっているという事実。今も望郷の念を抱いていること……。その言葉一つ一つから、不法占拠に対する怒り、悔しさ、そして悲しさが伝わってきた。そんな元島民の思いを胸に刻み、僕達は北海道を訪れた。

高橋はるみ知事表敬のために北海道庁を訪問したが、公務のためお会いできなかったので、代理の方から、富山県は北方領土からの引きあげ者が北海道に次いで多いことを教わり、富山県にとって北方領土は身近にあることを認識した。また、引きあげ者総勢約一万七千人のうち約六割を占める一万人の人が自分の故郷を訪れることさえも叶わずに亡くなってしまう、残る七千人の平均年齢も八十三歳を超えらるといふ厳しい現状を知り、北方領土を返還してほしいという気持ちが増々高まった。

最終日には、根室市にある納沙布岬から北方領土を眺めた。最も近い貝殻島は三・七キロメートルしか離れておらず、その中間にある国境を見たときは、ロシアが日本を拒絶しているような疎外感を感じた。また、日本の中でも限られた所しか行えないこんぶ漁を行っているのもその近辺であり、こんぶが採れるのは国境の向こう側。自分たち

の領土であるにも関わらず、島周辺で漁をするにはロシアに多額のお金を払う必要がある。

北方領土は、ロシアに一度も占拠されていない。歴史的に見ても、やはりおかしい状況なのだ。また、それは正すべき状況でもある。しかし、今仮に、ロシアが日本に領土を返すと言ったらどうだろう。ロシアの人を追い出してしまふのだろうか。不法に占拠していたとはいえ、そこには七十年間絶えず積んできた暮らし、歴史がある。文化がある。そして、北方領土を故郷とする思いがある。そんな彼らを追い出しているのだろうか。それでは、過去の日本と同じ想いをさせてしまうのではないか。そんな想いを誰よりも知っている元島民を持つ日本だからこそ、それは避けるべきだと僕は思う。しかし、不法である以上は、日本に返してもらわなければならない。

日本の元島民、ロシアの現島民、双方の意見、文化を尊重しつつ、「平和」に最も近い方法、それは「共存」だ。これは体験を通しての感想であり、元島民や現島民にとっては納得のいかない内容であるかもしれない。

また、少しでも元島民が自らの故郷に足を踏み入れる機会を作るべきであるし、それはなるべく早く行われるべきでもある。だからこそ、それを知った僕らが、これからの

日本を支えていく僕らが、発信していき、この北方領土問題をおさなりにしないことを決心した。

北方領土が無事に日本に返され、日露関係も良い方向へと築けてはじめて、「北方領土問題が解決した。」と言えるのではないだろうか。

富山県「北方領土問題」教育者会議会長賞

今、北方領土について考えること

高岡市立牧野中学校 二年 吉崎 綾夏

私は、最近社会の授業で北方領土について学んだ。私は、社会が得意ではなく、北方領土がどこにあるのかも知らなかった。私が住む日本の問題なのにこんなに無知で、無関心でよいのだろうか。私はこんな自分が情けなくなつた。

調べてみると、なぜ北方領土が問題になるのか少しだけわかってきた。北方領土は、北海道の北東にある国後島・択捉島・色丹島・歯舞群島の島々である。水産資源が豊富な漁場で、多くの日本人が住んでいたが、第二次世界大戦

後にソビエト連邦に占領され、日本人は強制的に退去させられた。そして、戦後七十年以上が経った今でも、その状態が続いている。それが問題となっているのだ。

正直、国家レベルの話はよくわからない。しかし、私にもわかることが一つある。それは、強制的に退去させられた人々の気持ちだ。

私は、富山県で生まれ、富山県で育った。水がおいしくて、空気がきれいで、人が優しい。こんな富山県が大好きだ。だから、もしも違う国の人々から急に、「ここは、我々の領地だ。今すぐ出ていけ。」と言われたら、絶対に納得できない。とても悔しくて悲しい。

きつと、島の人達も同じ思いだっただろう。「悔しい、早く島が戻ってきてほしい。」と。しかし、その願いは叶わないまま、今に至っている。

では、現在北方領土には誰が住んでいるのか。現在はロシアの領土なので、ロシアの人が住んでいるようだ。だとすると、その人たちは、そこで生まれ、そこで育ってきたのだらう。彼らにとっての故郷は北方領土なのだ。だから、今この島に住んでいる人に、「日本の領地だから返せ。」と言って強制的に退去させたら、彼らの大切な故郷を奪うことになる。そんなことをしても、また憎しみの感

情が生まれるだけで本当の解決にはならない。

そこで、私が考えたのは、日本とロシア、二つの国の人々が一緒に暮らすというものだ。これを実現するためには、両国が仲良くなり信頼関係を築くことが大切になる。そのために、例えば、日本人は簡単なロシア語を勉強し、ロシア人は簡単な日本語を勉強する。両国が通訳なしで話せるようになったら心の距離が近づき、身近な存在だという意識が芽生えたと考える。さらに仲を深めるために、未来を担う中学生や高校生の交流を活発にすることが必要だ。中高生同士が交流を行えば、文化や言葉の壁をこえて、きつと仲良くなれる。お互いの国の歌を歌ったり、郷土料理を一緒に作ったりして、それぞれの国のよさを知ることができる交流をするとよい。

実現は難しいかもしれないが、北方領土を故郷として大切にする気持ちは日本人もロシア人も同じだ。私は、北方領土が日本人にも、ロシア人にも大好きな故郷になってほしい。

二つの国で一つの土地を奪い合うのではなく、手を取り合って守っていく。そんな未来がくることを望んでいる。私は、これから北方領土問題に関心をもち、ロシアという国についても知っていききたいと思う。みんな大好きなすて

きな島々になると信じている。

入 選

北方領土復帰促進北海道派遣団に参加して

入善町立入善西中学校 二年 鍋嶋 夏音

ある日突然、自分の故郷から追い出されたら、あなたは
どう思いますか。私は、この質問をされるまで毎日故郷で
生活することが当たり前になっていました。しかし、北方
領土の方々はその当たり前を奪い取られてしまったの
です。北方領土とはどうなっているのか、実際に自分の目
で見て確かめてみたいと思いました。

八月五日、北方領土返還要求根室市民大会に参加し、そ
の中で、元島民の方々の生の声を聞かせていただきました。
た。ご高齢の方がほとんどで、島での記憶を語り続ける人
も少なくなってきた中、故郷に帰りたいという願いが
実現されていないことに何とも言えないもどかしさを感じ
ました。参加者全員で「四島を返せ」「北方領土は日本の
領土」と空高くこぶしを挙げてシユプレヒコールをする姿
は、北方四島の返還に対する強い気持ちを感じることがで

きる貴重な体験でした。

八月六日、最終日には、根室市にある日本の最東端、納
沙布岬を訪れました。あちらこちらには数々の記念碑が建
ててあり、たくさんの人たちの強い思いがこの地にはある
んだなと実感しました。岬に立ってみて驚いたことは、目
と鼻の先と言ってもいい程近くに北方領土が見えること
でした。私は、こんなにも近いのに何故、足を踏み入れるこ
とが出来ないのだろうか、七十三年もの月日がたっている
のに何故、解決出来ないのだろうかと改めて思いました。

もし、北方領土が返還されたとしたら現在住んでいる口
シア人はどうなってしまうのでしょうか。北方領土で生ま
れ育ったロシア人はそこを自分の故郷として生活している
のですから、その生活を奪ってしまつたら、と考えると一
方的に返還を主張するのはどうなのだろうと思うところも
あります。私は、そこが領土問題の一番難しいところでは
ないかと思っています。

日本とロシアが領土問題について正しい知識を理解し合
い歩みよること、若い世代に語り伝えていくことが解決へ
の道ではないかと思っています。

もし故郷が奪われたら

黒部市立鷹施中学校 三年 中瀬 結衣

もし故郷が奪われたら、あなたはと思うだろうか。自分が生まれ育ち、喜びも悲しみも味わった思い出のつまった場所が突然占領されてしまったら。私なら、大切なものをいきなり奪われたショックで、打ちひしがれることだろう。

私がこのように考えたのは、中学校で総合的な学習の時間の一環として、北方領土の元島民の方のお話を聞いたことがきっかけである。

北方領土問題は広く知られている日本の領土問題の一つである。北方領土は北海道の北東につらなる島々の総称で、私たちの住む富山県からも、多くの人々が出稼ぎのために北方領土に移り住んだ。一九三九年に第二次世界大戦が勃発し、日本はソ連と「日ソ中立条約」を締結した。しかし、その後ソ連はこの条約を一方的に破棄して日本に侵攻。一九四五年九月には北方領土を占領した。

私たちが話をうかがった元島民の方は、五歳のときにソ連軍が島へ攻めてきて、命からがら富山へ逃げてきたと語った。「島へ戻りたい。」そんな切実な願いをひしと感じた。

先日、私はテレビで北方領土についての番組を見た。画面に映し出されたのは現在の北方領土の様子だった。カラフルな四角い建物に見慣れない食べ物、飛び交うロシア語……。そこはすっかりロシアの一部になっていたのである。私は衝撃を受け、北方領土問題の難しさを痛感した。

どうすれば、この問題が解決するのだろうか。北方領土はもともと住んでいた日本人にとって故郷であるが、そこで生まれたロシア人にとっても故郷なのである。だから、もし日本が強引に北方領土を取り戻すならば、過去のソ連がしたことと同じになってしまう。互いのことを理解し合うことで、日本もロシアも納得できる方法で、この問題が解決してほしい。また現在元島民の高齢化が進み、富山へ引き揚げた人々の半数以上が亡くなってしまった。このままでは北方領土での体験や当時の様子を知る人が減る一方である。それを聞いて私は、私たち若い世代が語り継いでいかなければならないという使命感を感じた。北方領土問題を風化させないために、帰郷を果たさずとも亡くなった

元島民の方々のために、私たちは訴え続けなければならぬ。

この問題は国と国との問題であるから、私のような一人の中学生が声をあげたところで、何かが変わるとは思えない。しかし、何もしなければ、この問題が解決することなど到底不可能である。私は願ひ続ける。北方領土問題が解決し、誰もが幸せに暮らせるその日まで。

入 選

北方領土と私たち

黒部市立高志野中学校 三年 金子 麻琴

今までほとんど知識も関心も無かった「北方領土」に初めて触れたのは、学校の総合的な学習の時間でした。そして、夏休みから今までたくさんのお話を学びました。インターネットで調べたこと、実際に北方領土に訪問した生徒の話、根室市の高校生の話、元島民の方々の話などを聞いて、感じたことはたくさんあります。

夏休み、まずはインターネットで北方領土について調べ

ました。テーマとしては、私たちが住んでいる富山県と北方領土の関わりを調べました。富山県には、たくさんのお民がいたことから、漁業の不振が続くと生活が苦しくなる人々が多かったらしいです。そのような人々が向かった先が北海道、樺太、北方領土。北方領土へ渡った富山県民は、第二次世界大戦終戦時には二〇二世帯、一三一人いたそうです。北方領土へ渡った理由は、こんぶが多く採取でき、漁業をするための干場や権利を富山県出身の北海道人から有利に借りられたからだそうです。そのような理由から、富山県と北方領土の関係は深くなっていました。富山県と北方領土の関係についてインターネットで分かったことはこのくらいでした。現在の北方領土について分かったこともたくさんありましたが、北方領土問題に対する、元島民の方々の思いのほうに私の心には、すごく印象強く残っています。

十一月七日、元島民の方々をお招きして、北方領土学習を行いました。私が一番気になっていたことは、現在北方領土が占拠されていて、ロシア人が長い間住んでいること、北方領土がロシア人の故郷になりつつあることについてです。そのことについて質問すると、「占拠されてから北方領土を訪問したときに、ロシア人が住んでいるのを見

て、長い時間が経ったということを実感した。でも、その光景を見て、自分たちばかりが北方領土の返還を望んでいてはだめなのではないか。確かに今の北方領土はロシア人の故郷でもあることを実感した。」と答えてくださいました。自分たちの故郷でもある北方領土に対して、そのような感情を抱けることに、とてもびっくりしました。その他の質問にも、感じたことはたくさんあります。日本人とロシア人が一緒に住むことは心情的にできるのか。「しようと思えばできるが、本音を言えば自分たちの故郷なんだという思いが強い。」これからの北方領土問題の進展についてどう思うか。「一言で言えば難しいが、本音を言えばできることなら無条件に一日でも早く返してほしい。」

質問に対する答えの中に多かつた言葉がありました。「本音」。その言葉を聞く度に、元島民の方々の思いが強くなっているように感じました。北方領土を返してほしいという思いはもちろん、返還運動に対する思いも伝わってきました。自分たちが一生懸命返還運動をしても温度差がある。その話を聞いて、今まで北方領土に関心がなかったこと、返還運動という存在を知らなかったことに後悔しました。その後悔から、私は、元島民の方々の話を聞けたのに、その思いを無駄にはできないと強く思いました。返

還運動という大きなことをするように聞こえるけれど、親など身近な人に元島民の方々の思いを伝えるだけで返還運動になると聞きました。十一月七日の夜、私は母に北方領土学習の話をしました。話し始めると思ったより言葉が出てきて、自分が北方領土に対して強い思いをもっていることに、とても嬉しく思いました。

このような返還運動は、誰にでもできます。一言でもいので、身近な人に北方領土について話してみてください。自分の心にも話した相手の心にも変化があるはずです。

私は、一日でも早く北方領土が必要としている人々の手に戻ってくることを願っています。まだ、間に合いません。

入 選

交流から始まる解決

黒部市立高志野中学校 三年 長井 史花

北方領土とは北海道の根室半島に連なる歯舞群島、色丹島、国後島、択捉島の四つの島々のことです。最も近い歯

舞群島の貝殻島までは、北海道本島からわずか三・七キロメートルしか離れていません。そんな身近な島々が今、ロシアに不法に占拠されています。

私は今まで北方領土についてあまり関心を持っていませんでしたが、学校でこの問題が取り上げられ、資料を調べたり元島民の方々や北海道に住んでいる高校生の話を聞いたりしていく中で、今ある北方領土問題について深く考えることができました。

一八五五年、日魯通好条約が結ばれました。この条約で日本とロシアの国境が択捉島とウルップ島の間に定められ、千島列島はロシアの領土となりました。この条約により、北方領土は日本の領土であるということが法的に確定しました。一八七五年、次に結ばれたのは樺太千島交換条約です。ここで日本は千島列島をロシアから譲り受けるかわりに樺太全島を放棄しました。千島列島はウルップ島までの十八の島を指していて、この条約でも北方領土は日本の領土となっています。さらに一九〇五年、日露戦争の結果、ポーツマス条約を結び、南樺太が日本の領土となりました。しかし、第二次世界大戦終戦後ソ連が上陸し、北方領土の島々がすべて占領されてしまいました。そして現在に至るまで不法占拠されている状態が続いています。これ

が北方領土の歴史です。

実際に北方領土を訪問して学んだ友人の話を聞いて印象に残っているのが、「数年以内に、北方領土問題の話をロシアと進めなければ、そこから解決するまで長い時間がかかる」という言葉でした。たくさんの動物が住んでいたたり世界三大漁場になっていたりもする自然豊かな北方領土。しかし現在は工場なども建てられ、急速に開発が進んできているようです。近年では港も作られようとしていて、ロシアは北方領土からの貿易を考えているそうです。開発が進むということは、それだけ北方領土がロシアのものになりつつあるということです。少しでも早く北方領土問題を解決しなければ手遅れになりかねないのだということを知って、私は危機感を覚えました。

また、元島民の方々のお話を聞いて、富山県には北方領土と深い関わりがあるということが分かりました。富山県の人々の中には北海道へ出稼ぎに行って大きな利益を得る人が多くいました。また明治の終わり頃、富山県で災害によって漁業を仕事にしていた人々の生活が苦しくなり、そのとき北方領土の島々に定住し、そこをコンブの漁場として開拓していく人々もいました。このように、北方領土の島々の発展と富山県の人々は深く関わりがあつたのでし

た。

現在、北方領土に住んでいるロシア人との交流の機会は多くあるようです。日本人とロシア人が互いに行き来しながらお互いへの理解を深めることで、北方領土問題の解決につながるようとする交流事業があり、積極的にたくさんの方が参加しています。そのような交流を通して相互理解を深めていくことは、北方領土問題解決への大きな一歩となると思います。

しかし、現在に至るまでの北方領土の歴史を、ロシアの人々はどうのように認識しているのでしょうか。もしそこに溝があつたら、この問題を解決するのは容易なことではないと思います。ロシアの領土開発には一刻も早く手を打ちたいところですが、急いで解決しようとするあまりこちらの主張を押しつけるばかりでは、聞く耳すら持つてくれないくなるかもしれません。私は小さな会話の積み重ねが大切になってくると思います。私も交流の場に参加するなど、まずは会おうとすることから始めて、会話を通して問題解決に貢献していけたらと思います。

入 選

”心“を一つに返還の実現へ

黒部市立桜井中学校 三年 番匠 由芽

「北方領土」と聞いて何が頭に浮かびますか。「北方四島の名前」、「北方領土はロシアに不法に占拠されている」など、基本的な知識は浮かぶでしょう。私も以前までは、そのくらいのことしか知りませんでした。正直、日本の歴史上の一つの出来事として捉えていて、身近な問題とは考えていませんでした。

そんな私に、二度とないチャンスが訪れました。それは、「北方領土青少年等現地視察事業」です。他の学校の中学生と一緒に北海道を訪れ、現地の方の声を聴き、様々な風景を目に焼きつけてきました。北方領土の問題は私たちにはどうしようもないくらい大きな問題だ、と考えていた私の考えが一気に変わりました。肉眼で見える距離にある歯舞群島の島々を見て、距離的にもこんなに近くにあるのだと気づきました。また、元島民の方のお話を聞いて、気持ちの近さも実感しました。遠い存在と考えていた北方

領土問題が、とても身近なものになりました。

また、学校でも、元島民の方々のお話を聞く機会がありました。私は、この二つの経験を通して感じたことがたくさんあります。

その中の一つは、同じ元島民の方でも考え方が違うということでした。北海道でお話をうかがった方は、「ロシアの方と一緒に暮らすのも良いかもしれない」と、また島で暮らすことを望んでおられました。しかし、学校でお話をうかがった方は、「一緒に暮らす家族もないし、もし返還されても島に戻って暮らすことはないだろう」と、再び島で暮らすことへの諦めを感じておられました。私は、「故郷に帰りたい」という想いがなくなってしまうたら、返還運動への意欲もなくなってしまうのではないかと思いました。しかし、長年運動を続けてこられて、それでも成果が表れないという現状をみると、そのような気持ちになってしまうのも無理はないと思います。だからこそ、私たちが運動を受け継ぎ、返還を求める気持ちを途切れることなく伝えていく必要があると思いました。

もう一つ感じたことは、北方領土問題を解決したいと考える人が少ないということです。学校でお話をうかがった元島民の方は、「駅前で署名活動をして、集まるのは二、

三人分ほど。個人情報だから、なかなか書いてくれない。」とおっしゃっていました。私は、とても残念に思いました。私は北海道で署名をしてきたし、他の中学生もみんな署名していました。だから、署名は最も身近な返還運動への参加手段だと思っていました。しかし、それにすら協力する人が少ないということに、本当に驚きました。一部の人だけが運動を行っていても、返還は実現しないと思います。「実際に交渉を行うのは政府だ」と思うかもしれませんが、それだけでは解決していかないのが現状です。最後に人を動かすものは、やっぱり「心」だと思います。極端に言えば、日本国民全員が声を一つにして返還を望めば、ロシア政府も何もせずにはいられないと思います。つまり、同じ想いをもつ人が増えれば増えるほど、願いは実現しやすいということだと思います。「北方領土を返還してほしい」という想いをもつ人が増えれば、返還の実現に近づくと思います。

北方領土問題が解決するかどうかは、現代の私たちにかかっています。他人事ではなく身近なものとしてこの問題について考えてほしいです。きつと、たくさんの方が「心」を一つにすれば、想いは届きます。あなたもその中の一人になりませんか。

北方領土問題について考える

魚津市立東部中学校 三年 中松 誠悟

僕はこの夏、第四十九回富山県北方領土復帰促進少年少女北海道派遣事業に参加しました。色々な立場の方々と出会い、語り合うことで、北方領土返還に対する熱い思いを感じることができました。また、北方領土問題の様々な面を学ぶことができました。これは、教科書やビデオ研修では到底感じ取ることができないリアルなものでした。

この事業に参加するにあたり、元島民の方から富山県と北方領土の関わりについて話を聞きました。四島の中でも歯舞群島は僕たちの先祖が苦勞を重ねて開拓した歴史があり、北方領土の元島民に占める富山県在住者の数が北海道に次いで多いことを初めて知りました。僕はそのことを聞いて、北方領土問題が自分たちの身近にあることを認識しました。

また、僕自身が日本に住んでいるのに北方領土の歴史やロシア人のこと、今の状況など、知らないことが多いなと

思いました。ほとんどが初めて見たり聞いたりすることで、改めて僕自身の北方領土問題に対する認知度の低さを知りました。

今回の経験をふまえて、今僕が思うことは、北方領土は日本固有の領土であるので、少しでも早く返還してもらいたいということです。しかし、ロシア人をすぐに追い出しては今の日本と同じ状態になってしまいます。不法占拠とはいえ、七十年以上もそこに住むロシア人の生活があるのです。この人たちを無理やり追い出してしまったのは、また新たな悲しみを生み出すことになってしまいます。しかし一方で、ほんの数キロ先にある故郷に帰ることのできない元島民の無念も忘れてはなりません。元島民の方々の思いも、今島に住んでいるロシア人の生活も大切にしながら、みんながこれ以上の悲しみを背負うことのないようにするためにはどうしたらよいかを考えることが大切だと思います。そこで、どちらの国籍の人でも住むことのできる島としてはどうだろうかと思いました。

北方領土問題を解決するのはとても難しいことです。すべての人が納得できる答えは見つからないのかもしれない。しかし僕は、これからも北方領土について学び、考えていきたいと思えます。

今回の事業に参加し、あまり関心のなかった北方領土問題について様々な視点から学ぶことができました。以前の僕のように、北方領土問題に深い関心をもっていない人が多いのが現状です。元島民の方にお会いして実際にお話を聞くことで、僕の意識は変わりました。何とかしたいと思、様々なことを知りたいと思いました。これからは僕自身が北方領土のことを語り継ぐよう努力していきたいです。僕が経験したように、日本の多くの人々が北方領土について学び、そして関心を高めてくれることを願っています。

入 選

私達が北方領土問題でできること

上市町立上市中学校 二年 池永 奈央

日本には、まだ解決していない領土問題があります。その一つが北方領土問題です。北方領土には四つ島があり、北海道より北にある国後島、択捉島、歯舞群島、色丹島の四つの島が、北方領土の島のことです。

北方領土は、こんぶをはじめとする豊かな漁場です。明治の終わりのころには、こんぶ漁が盛んになりました。富山県の出稼漁民は歓迎され、富山県からたくさん漁民が出稼ぎに行くようになりました。大正になると、定住する漁民が増え、さけ、ます漁に進出する人たちも数多く現れました。このように、こんぶ漁は、私たち富山県の先人によつて開拓されました。ですから、北方領土と富山県は深い関わりがあります。

太平洋戦争（第二次世界大戦）が終わる直前の一九四五（昭和二十）年、八月九日に日本へソ連が宣戦布告を行いました。そして、八月二十八日にソ連は北方領土に侵攻してきました。北方領土が占領された当時、日本とソ連は日ソ中立条約を結んでいたのに、ソ連は一方的に破棄し、日本がポツダム宣言を受諾し、降伏の意図を明確に表明したにもかかわらず、ソ連軍が北方領土に侵攻してきました。北方領土で暮らしてきた人たちは、その後、自力で脱出したりしていました。残されていた人は、強制的に島を追われ、日本本土に送還されました。

今年、北方領土の墓地に埋葬されている方々を慰霊するために、北方領土の元島民や親族が空路で北方領土を訪問しました。墓参は、一九六四（昭和三十九）年に始まり、

これまでに約四千五百人が参加しています。空路募参は負担が少ないため、空路募参を求める声は多く上がっています。

富山県では、元島民の方々が会をつくっています。今は、人数が少なくなってきました。島の会の方々は、だんだん亡くなつていかれています。ですが、若い人が入ってくることはありません。

北方領土の元島民が多い富山県では、県内に住む元島民により、返還要求運動が進められてきています。一九八〇（昭和五十五）年には、「北方領土問題の解決促進に関する意見書」が、県議会で議決されました。一九七〇（昭和四十五）年には、「北方領土復帰北洋安全操業促進富山県大会実行委員会」が結成されました。その後、一九七九（昭和五十四）年には、「富山県北方領土復帰促進協議会」に改名され、ニューヨークの国連本部へ北方領土返還実現を要望するなどの運動を展開しました。

黒部市内には故郷である北方領土を自由に訪れることができる日を願う元島民の方々が、大勢おられます。北方領土問題は、元島民の方々だけの問題ではありません。日本の重要な問題です。一人でも多くの方々が北方領土問題を正しく認識し、領土返還の世論を高めることが求められて

います。大切なのは、日本国民として「知っておくこと」、そしてそれを「次世代へ伝えていくこと」です。一人一人がそれをする事で、国民の強い意志にささえられたロシアとの交渉が、北方領土問題の解決につながるのです。

私達、中学生ができることは、一人一人が北方領土問題について考え、正しい知識を受け継いでいくことだと思います。そして、署名運動や返還要求運動に積極的に参加していくことです。これらのこと一つ一つに取り組んでいくことが、私達が今できること、そしてこれからできることだと思います。

入 選

北方領土を取り戻すために

上市町立上市中学校 二年 堀田 雅乃

故郷。それは誰にとっても深い思い入れがある場所である。そんな場所であるのに戻ることができない。ロシアに不法に占領されている北方領土がそうである。

元島民にとっては大切な故郷だが、いまだに北方領土問

題は解決には至らない。戦後七十年以上経ち、元島民の高齢化が進んでいる。

また、故郷をもう一度見ることができずに亡くなった人もいる。若い世代にこの問題を語り継いでいかなければ、解決までさらに時間を費やすことになるだろう。日本人、ロシア人ともにこの問題の理解を深めることで、解決に近づくことができるだろう。

北方領土が返還されると、人々の故郷だけではなく、多くの水産資源を得ることが出来る。国にとっても大きな利益となるだろう。

だが、それは同時にロシアが多くの土地と資源を手放すことになる。

つまり、北方領土が戻ってきてても、「北方領土問題が解決した」とは言えないのだ。島々が返還されると、元島民は「故郷が戻ってきた」と喜んで、現地のロシア人は「故郷が奪われた」と悲しむだろう。ロシア人は故郷を想い、日本のように返還を求めるだろう。この問題は解決することが難しい現状だ。日本人はロシア人のことを考え、客観的な立場からこの問題を見ることが大切だ。

富山県は北方領土からの引き揚げ者が全国で二番目に多い。千人以上の人々が引き揚げられたのだ。この引き揚げ

者の多さがこの問題の難しさを表している。私は日本とロシア、この両国が納得のいく結果となつてほしいと思う。

平成四年から、両国では「ビザなし交流」が行われている。ビザもパスポートもなしで相手国を訪れることができるのだ。これにより、ロシアは日本に対する偏見がなくなつたらしい。日本人には、北方領土が返還されたらロシアの人々と一緒に住んでもよいという声もあるそうだ。

私はこの交流の機会をもっと増やすべきだと思う。相手国に対する偏見は、ロシアだけではなく、日本も感じていると思う。日本は周りを海に囲まれていたり、一時期鎖国状態であったりと昔から他の国との交流が少なかっただろう。今は多くの国と交流しているが、私たちは異国の人々をフィルター越しで見ていると思う。また、国境の違いを大きく感じていると思う。私たちはそれらをなくしていくことによってロシアとの隔たりも小さくなるだろう。

北方領土問題の解決に向け、私たちにできることは何だろうか。

一つは、この問題を若い世代に語り継いでいくことだ。もう一つは、主観的な立場からではなく、客観的な立場からでも物事を見ていくことだ。さらに、他の国の人に偏見を持たないことも大切だと思う。

このように、私たちが変わっていかなければ、このまま北方領土が八十年、九十年と戻ってこないだろう。私は生まれ育った故郷を想う人々を忘れず、これからの生活を送っていききたいと思う。

北方領土が故郷である両国の人々が、理解し合い、交流を深めていってほしいと思う。また、国どうしでお互いの偏見や誤解をなくし、仲を深めてほしいと思う。とても難しい国際問題だが、一歩ずつ解決に近づくことはできるだろう。何十歩、何百歩と進むうちに、解決の糸口がきつと見つかるだろう。

私たちができること。それを国全体で考えてほしいと思う。私たちは少しずつ変わっていかなければならない。

入 選

一人の意識が未来を変える

富山市立呉羽中学校 三年 矢後亜優美

私は自分の学校で行った平和学習で広島・長崎を襲った原爆のおそろしさや、地元富山県の「富山大空襲」の被害

の大きさなどを学びました。黒部市に住んでいる友人にこのことについて話すと、黒部市の平和学習と私の学校の平和学習とは内容が異なっており、黒部市では北方領土問題について各自で調べるそうで、地域の方の講演を聞いたり、家族や友人と話し合うということもしているそうです。

同じ富山県で学習している内容に差があることを不思議に思い調べてみると、富山県は北方領土からの引き揚げ者が北海道に次いで全国で二番目に多く、その中でも黒部市は特に多いからだそうです。

では、一体いつから北方領土がロシアのものになったのでしょうか。そこにいたるまでの経緯を調べました。およそ百六十年前の一八五五年に日本・ロシア間初となる国境の画定を行いました。それが日露和親条約です。それから第二次世界大戦までの間、北方領土は日本の領土でした。

しかし、一九四五年九月、ソ連が北方領土を占領して「北方領土は合法的に自国領になった。」と主張したことで、現在まで北方領土はロシアのものになっています。

この問題は話し合いで解決すると私は思います。なぜかというと、私もある「領土問題」をかかえていたことがあり、そのときに話し合いで解決したことがあるからです。

その「領土問題」というのは、部活動の活動領域の問題です。いつもは私の友人が音楽室を使うのですが、他の人たちが先に占領していて「僕たちが音楽室を使う。」と言われてしまい、ちよつとした言い争いになってしまいました。ですが、その人たちは決められたルールに背いて占領していたため、私の友人がルールを詳しく最初から説明してあげたら占領を止め、謝ってくれました。日本とロシアもこのようになれば良いと思います。ですが、すべてが私のとさのようにいくわけではないと思います。しかし、互いの理解を深め回復に向けて動き出すことは、私たち中学生にもできることだと思えます。その例が「ビザなし交流」です。日本人と北方四島在住ロシア人が相互理解を深める目的で行われています。

友人に「ビザなし交流」の写真を見せてもらったときに、日本の学生たちがロシア人と一緒に笑顔で写っていることに気が付きました。住んでいる国がちがうというだけで、平和への思いは同じであるという事に改めて気付かされました。

わたしは友人と話をするまで、北方領土について何も知りませんでした。私のような人はまだたくさんいると思います。なので私は、いつでも聞かれたときにすぐ北方領土

問題について答えられるようにすることが大切だと思います。そしてこれからの課題は、日本とロシアの両国の信頼を丁寧に築いていくことだと思えます。

入 選

北方領土という存在

南砺市立福光中学校 二年 前村 愛結

私は、八月十九日から八月二十二日までの四日間、北方領土返還要求運動富山県民会議主催の北方領土青少年等現地視察事業に参加しました。この作文では、視察事業で見たこと、聞いたこと、思ったことを説明します。

まずは、元島民の方のお話です。元島民で択捉島出身の鈴木咲子さんにお話を聞くことができました。鈴木さんは小学校一年のときにお兄さんが戦地へ行きました。必ず生きて帰ってくると強い気持ちを持ち続け、日々の生活をしていました。終戦の八月十五日、近隣の住民の方から「鈴木さんのお兄さんがソ連にうたれて亡くなった」と連絡が入ったそうです。それから、「ソ連には何をされるか分か

らない」と島民が思い、女性は、男性の服装をしたり、家の倉庫に隠れたりしてソ連から逃れていたそうです。それから、その生活も苦しくなっていく、北海道根室市まで一日くらいで到着するソ連が運営する船に乗りました。でも一日たつても全く根室に到着しません。そこで鈴木さん達乗客が、ロシア人の乗務員を問い詰めると「樺太に行きます」と言われたそうです。そして樺太に到着したら、強制収容所に入れられたそうです。そこでの生活は容易ではありませんでした。何千人も亡くなったそうです。このように元島民の方は、今でも北方領土での生活を鮮明に覚えていると思います。このような方のためにも、一刻も早く北方領土を返してほしいです。

次は、領土問題と歴史についてです。富山県は北方領土から引き揚げてこられた方が北海道に次いで多い県だといふことが分かっています。また、北方領土は昆布漁で栄えており、富山県から出稼ぎに行く人も多く、その近海の昆布漁は富山県民が築きあげたといっても過言ではありませんが豊富にいて、最高の漁場になっています。その海には、今も簡単に入ることができません。領土問題では、今もロシアと平和条約を結んでいません。もっと和平に向けて推

し進めていくべきだと思います。

最後に、私たちにできることです。私なりにできそうなことを考えてみました。北方領土へ渡ることが出来る唯一の方法はビザなし交流を利用することです。普通外国に行くときには、パスポート、ビザが必要です。でも定期的に行われているビザなし交流は、互いを外国と認めないということで行われています。日本人が行くか、現島民の方が来られるかは分かりませんが、会って互いの意見や思いを話したいです。そうすることで平和条約が見えてくるかもしれません。

私は、今回の視察事業でこの作文ではおさまりきれないたくさんさんの体験を通し、たくさんさんのことを学びました。これからもこの貴重な体験を忘れず、北方領土についても考えを深めていきたいです。北方領土という呼び名ではなく日本の一番北の島として、両国が納得できる和解を一日も早くしてほしいと願っています。